随想

災害と情報

皆川迪夫
（全国町村会事務総長
(財)消防科学総合センター二代目理事長）

昨年は――昨年もといった方がよいかも知れないが，災害や事故の多い年であった。テレビというものは，見たことのない外国の出来ごとでも身じかなものにしてしまうので，一層その感を深めるのかも知れない。コロンビヤの火山噴火による泥流は，瞬時にしてアルメロの町を埋没し，23,000人余の命を奪ったが，首まで泥水に埋った12歳の少女が，救助を待って60時間も頑張った末，ついに力つきて沈んで行く姿は，まことに無惨なものであった。

一方日航機の墜落では，生存者がいたことさえ奇跡であるのに，無事ヘリコプターで救出される様子は，悲惨な報道の中にあって，大きな救いであった。それにしても，もっと早く救助隊が現場に着くことはできなかったであろうか。墜落直後にはもっと多くの生存者がいたらしいだけに，残念でならない。初期の対応にぬかりはなかったであろうか。

一般に災害や事故の場合，事後の情報は過度に氾濫するが，事前又は初期の情報は量も少なく，しかもそれすら軽視されがちである。アルメロの場合でも，噴火は午后3時頃から始まり，9時過ぎに最も大きな爆発があったということであるが，過去に2回も泥流に襲われた経験がある町としては，その段階で何等かの対応があってもよかったのではなかろうか。なんでも人災にしてしまうのもどうかと思うが，謙虚な反省は必要である。

話は変るが，1月8日の各新聞は，三洋電機の社長が石油ファンヒーターによる死亡事故の責任をとって辞任すると一斉に報道していた。同社の製品に欠陥の疑があることは昨年の始めにわかったが，「悪い情報トップに届かず」で，適切な処置を誤り遂に相次ぐ死亡事故を起してしまったというのである。会社は新聞広告によって欠陥を公表し，徹底的に製品の回収を図ろうとしたが，「製造部門や販売部門から強い抵抗が出た」ため，思いきったことができなかったと報じている新聞もあった。真偽の程はわからないが，ありうることのように思われる。

自然災害は誰の責任でもないから，予告に躊躇はいらない筈である。しかし予告によって生ずる社会的混乱を想うと二の足をふむこともあろう。ただから振りを恐れてばかりいては何もできない。その限界について社会的合意を求めることは，急務であろう。心配される東海地震の後で，「実は予兆はあったのだが」といった弁解は聞きたくないものである。